



© A.SASAKI

初心に返り “ドキュメンタリー映画”を監督

第1回監督作品『マジでガチなボランティア』

●メディアフォーユー株式会社 代表取締役社長
里田 剛 さん —経済学部 1994年卒業—

2010年12月に渋谷(東京都)の映画館で公開されたドキュメンタリー映画『マジでガチなボランティア』は、里田剛さんの初監督作品。

テレビの人気番組のディレクターを務め、報道番組を担当してきた里田さんは、映像制作会社を経営しつつ、今後はドキュメンタリー作品も送り出していきたいという。映像とのつきあいは関西大学の学生時代に始まった。

里田 剛—さとだ つよし

■1970(昭和45)年、奈良県生まれ。94年関西大学経済学部卒業、株式会社ネクサスに入社。テレビ東京「開運なんでも鑑定団」など約10番組のディレクターを務める。98年からフリーランスとして活動し、TBS「サンデージャポン」などを担当。2006年メディアフォーユー株式会社を設立。会社紹介映像などの制作とともにドキュメンタリー映画も手がける。



里田さんは関西大学第一高等学校の卒業生に、一人で韓国を旅行した。その経験が大学時代のライフスタイルを決定づけた。

「電車の中で『私は日本人が嫌いだ、豊臣秀吉が嫌いだ』と言われた。国籍によって嫌われることに衝撃を受けましたが、逆に親切にしてもらったりもして、すごく新鮮だったのです」

里田さんはアルバイトをして、休暇には海外へ出掛けた。アメリカ横断、シルクロード、東南アジア、ヨーロッパ、イスラエル、エジプト…。「自分の経験を何か形にしたいとずっと思っていました」

故 石田浩教授の中国経済のゼミで、中国の農村のフィールドワークを行った際、里田さんはビデオカメラを回した。「それを編集して石田先生にお渡しすると、写真や話だけでは伝わりにくいことが、映像を見せるとすぐに理解してもらえたと喜んでいただきました」

いつかNHKスペシャルのような番組を作りたいと思っていた。しかし、テレビ制作会社に入社してみると、バラエティ番組全盛の時代。ディレクターとしてかわった「開運なんでも鑑定団」など、何百万人もの人が見ているという手応えがあり、夢中になって作るようになった。

TBSの「サンデージャポン」でコーナー担当のフリーディレクターになってからは、事件現場に行きレポートする役も務めた。しかし、里田さんの中では、放送の限られた枠内では大事な部分や本質が伝えられないというジレンマが深く大きくな

ていったという。結局、テレビを辞めて、約1年半後に映像制作会社を設立した。

「営業をしたことがなく、自分にできることは映像を作ることだけ。本や雑誌で見て面白いと思った会社を訪ねていって『取材させてください』と、突撃制作みたいなこともしました(笑)」。監督デビュー作となった『マジでガチなボランティア』は、合コンとナンパに明け暮れていた大学生がボランティア活動を通じて、カンボジアに小学校と診療所を建てるまでの3年間を描いている。

「撮り始めたときは、映画にする意図など全くなかったのです。劇場公開映画にしようと決めてからが地獄でしたね。もともと映画用に撮っていない、撮り逃した素材もいっぱいある。病院が完成すると分かったのはかなり後で、話がどこに転ぶか分からない。夜中の12時ぐらいまで普段の仕事をこなし、それから映画の編集を始めるのですが、明け方になると眠くて頭が回らなくなり、床にごろりと寝て、また朝が来る。すごく鍛えられましたね、ハッハッハッ」



「何かに本気で取り組んだ人だけが知る、歓喜と絶望を描いた」というが、それは里田さん自身のことであった。また、初心を思い起こす過程でもあったようだ。里田さんは今後、1年に1本、10年に10本のドキュメンタリー映画を作りつづけるつもりだ。